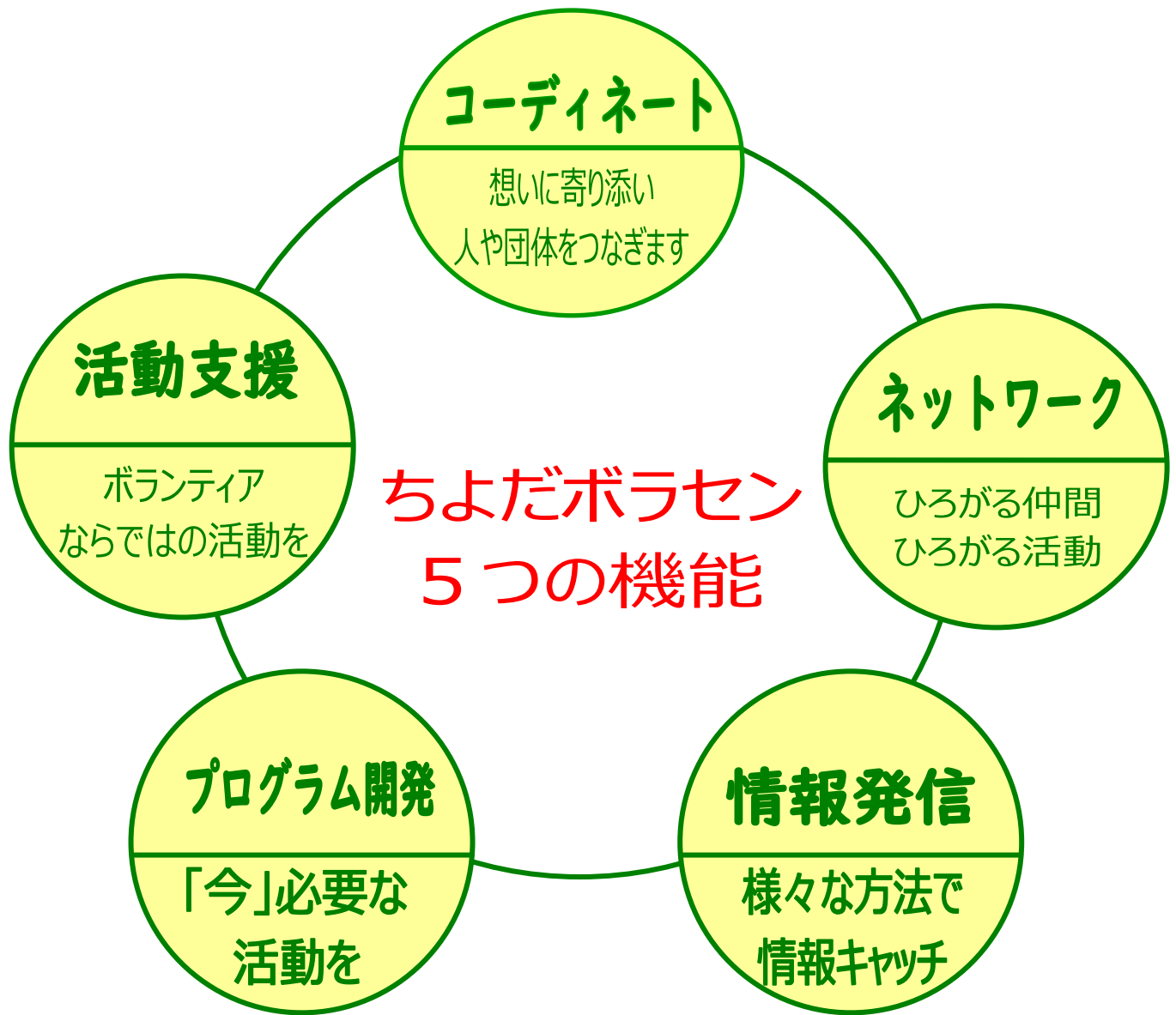


ちよだボランティアセンター・レポート



～みんなが参加し、支え合うまちづくり～

社会福祉法人 千代田区社会福祉協議会
ちよだボランティアセンター

〒102-0074 千代田区九段南 1-6-10 かがやきプラザ 4階

電話 03-6265-6522 FAX 03-3265-1902

E-mail volunteer@chiyoda-cosw.jp URL <https://www.chiyoda-vc.com/>

ちよだボランティアセンターは「千代田区に住み、働き、学ぶ人がお互いに気に向け、笑顔が生まれるまち」を目指しています。



【1】ボランティアの登録・活動状況

年度	令和4年度	令和3年度	令和2年度
個人ボランティア登録者	235名	324名	265名
登録グループ	135団体	157団体	162団体
活動件数	4,493件	4,146件	3,779件
活動延べ人数	31,851名	25,831名	17,588名
相談件数	1,057件	931件	863件

【2】ボランティア等の相談状況

相談内容	令和4年度	令和3年度	令和2年度
ボランティア活動希望	159件	109件	103件
ボランティア募集希望	61件	51件	40件
その他の相談	837件	771件	720件

その他の相談の内訳

	令和4年度	令和3年度	令和2年度
センター事業の問合せ	107件	118件	71件
活動の企画協力	40件	53件	64件
寄付	28件	40件	34件
企業の社会貢献活動	65件	36件	113件
物的資源の利用	34件	29件	43件
ボランティアグループの設立・運営	13件	19件	7件
NPO法人の設立・運営	1件	4件	2件
その他(災害支援、広報、保険など)	549件	472件	386件
合計	837件	771件	720件

■分野別活動延べ人数

種別	内容	令和4年度	令和3年度	令和2年度
施設	高齢者施設、障がい者施設、児童施設、美術館、博物館など	3,296名	2,477名	1,465名
ボランティアグループ NPO等	国際協力、障がい者支援、高齢者支援 環境保護、子ども・家庭支援、手話など	18,541名	20,599名	15,620名
個人	使用済み切手整理、傾聴ボランティアなど	494名	171名	9名
社会福祉協議会事業	ふれあいサロン、地域行事他	9,520名	2,584名	488名

【傾向と課題】

- ① 個人ボランティア登録者の中に、仕組みを十分に理解されないまま登録者している人が多数いることが判明。改めて登録の仕組みを伝え、更新手続きを行う必要がある。
- ② 転居や卒業等、生活環境の変化、シニアボランティアの中には、高齢で活動が困難という理由でボランティア登録を辞退する方が多かった。
- ③ 登録グループの活動現況調査を行った結果、コロナ禍で活動の休止や解散に至った団体、連絡不通となった団体などが多いことが判明。また、活動を継続する団体でも、「メンバーの高齢化」、「活動の固定化」などの課題が、顕在化している。
- ④ 相談件数の増加に比例して、活動件数は増加傾向。特に企業からの社会貢献活動に関する相談が前年度比の約2倍になっており、地域の福祉課題の解決に関心のある企業が増加。 ※詳細は p.7-8参照
- ⑤ 分野別活動延べ人数も大きく増加。特に「ふれあい福祉まつり」をはじめ、地域行事が再開されたことにより、社会福祉協議会事業への参加が多かった。コロナ禍で活動が著しく減少した福祉施設での活動も、徐々に再開されつつある。

【3】個別ボランティアコーディネート

「制度の狭間」にある個別の生活課題に、多様なボランティアによる関わりだからこそできる支援を調整しています。

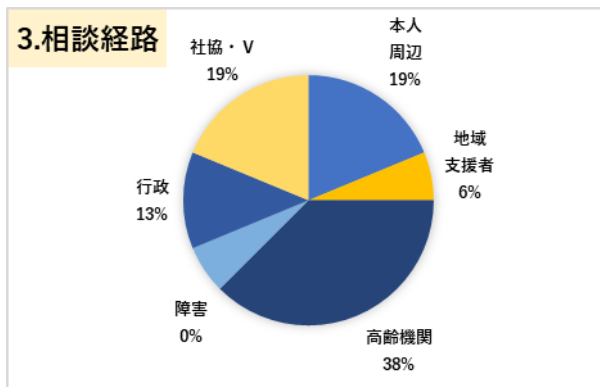
個別支援の対応件数

	令和4年度	令和3年度	令和2年度
新規	16件	6件	3件
継続	9件	3件	4件
合計	25件	9件	7件

支援内容の内訳 ※重複支援含む

支援内容	件数
傾聴(話し相手)	1
外出支援	2
家族のレスパイト	1
語学・通訳支援	3
余暇活動のサポート	4
買い物サポート	1
自宅の整理・清掃・引っ越し	2
他機関へのつなぎ・情報提供等	6

相談経路



【傾向と課題】

- ① 昨年度に引き続き、高齢者に関わる関係機関からの相談が多い。
長引くコロナ禍の影響による高齢者の気力・体力低下への対応が求められている。
- ② 外国にルーツを持つ方への通訳支援や、日本語の支援、特に子どもへの通訳・日本語学習支援を求める問い合わせが増加傾向である。
- ③ 求められる活動に対し、ボランティア活動者や区内で利用できる仕組みが少ない。共通の課題を抱える方に対する新しい仕組みづくりも検討が必要。
- ④ 長期にわたる活動についての見直し（モニタリング）が必要。

1) 気持ちに寄り添うボランティア(傾聴)

【身内が亡くなった後の寂しさへの対応】

兄弟・姉妹を亡くした後、喪失感や寂しさから落ち込むことが多かった女性。人と関わり、話す相手が欲しい。(関係機関からの相談)

心理的な寂しさに寄り添った「傾聴」をボランティア2名で対応した。

【その後】

ボランティアの訪問中は穏やかに会話を楽しみ、少しずつ気持ちに落ち着きがみられるようになってきた。ボランティアの関わりから約1年を迎え、本人のエンパワメントを意識した支援を検討していくことも求められている。

【課題】

- 在宅で本人の力が活かされる支援体制の検討。
- 在日外国人の日常生活支援の相談が増えている。言語と福祉両面から支援できる体制づくりが必要。

2) 外出時のきっかけボランティア(通訳)

【在日外国人への通訳支援】

外国籍の80代男性。これまでは妻が日本語の通訳をしていたため不自由なく過ごすことができた。認知症を患い、家族以外の人とのかかわりが減ってしまったが、外に出て人とのつながりや関わるきっかけが欲しい。(ご家族からの相談)

リハビリデイサービスや近所のお散歩の際に通訳としてボランティア数名で対応した。

【その後】

通訳サポートを受けながら楽しくリハビリに参加。また、ボランティアが来てくれる日を楽しみにしており、ご本人のモチベーションアップにつながっている

【4】ボランティア理解促進・活動支援

■ボランティア登録説明会・学習会

かがやきボランティア学習会

多文化共生ボランティア講座

<1回目テーマ>「千代田区の多文化共生を知る・考える」

- ①今、なぜ多文化共生なのか
- ②異文化コミュニケーションを体験するゲーム「バーンガ」
- ③多文化共生をすすめる基礎知識 「やさしい日本語」を知ろう
- ④千代田区に住む当事者の話を聴く



<2回目テーマ>「外国人住民との日本語を使ったボランティア活動あれこれ」

- ①フォトランゲージで多文化共生ボランティア活動を知る
- ②ボランティア活動事例紹介・活動の工夫(千代田区外活動を含む)
- ③ボランティア活動案内

・外国にルーツを持つ方へのボランティア依頼が増加傾向にある中、担い手不足が顕著であった。外国語ができなくても「できることからボランティア」を伝え、居場所づくり、多文化共生ボランティア、個人ボランティア登録、多文化共生のための普段の生活や働きの変容(例えば、やさしい日本語を取り入れた情報発信をするなど)のいずれかの方法に導き、結果、ボランティア活動につながる。

延べ参加者 56 名 / 2 回

【成果①】

参加された方の中から、2名の方を中心に新しいボランティア活動を開始。

うち3名の方が、個人ボランティア登録。

【成果②】

「何が困っているか」を具体的に知ることで、近隣住民ができる取り組みや“福祉観”が感じられた様子。「やさしい日本語」を学んだことで、ボランティアに語学力が必要なわけではなく、みんなで住みやすい地域をめざせることが共有できた。

新しく生まれた活動



アートで楽しむ多言語カフェの実施(令和5年度実施)

ボランティア学習会を通し、外国にルーツを持つ方の居場所づくりに関心を持った講座受講者による企画。ボランティア自身の特技を活かし、アートをツールに「やさしい日本語」及び、母国語で話せるカフェを実施した。今後は規模を拡大し、活動する方針を検討している。

【傾向と課題】

- ① 外国人住民からの福祉的な相談は増加傾向にある一方、まだ困りごとの全体像は十分に把握できていない。関係機関と連携し、より一層のニーズの掘り起こしが必要。
- ② 外国にルーツを持つ子どもの日本語支援などの相談が増加傾向にあるのに対し、子どもも通える地域の日本語支援の仕組み・取り組みが少ない。

■ ボランティア活動者交流会

ボランティア活動交流会 ① (既存活動者を対象)

【内容】

個別の困りごと支援をしている登録ボランティアの交流会を開催し、課題の共有など情報交換を実施。

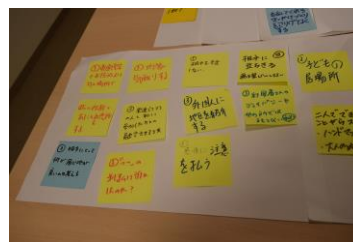


2回開催 延べ11名参加

ボランティア活動交流会 ② 「ボランティアって必要?ゆるく語る会」

【内容】

個別にボランティアで支援している目的と現状をコーディネーターから伝え、事例を通してボランティアでできることを参加者で考えた。



15名参加

【個人ボランティア登録者の傾向と交流会の成果】

- ・「役割を持つことを生き甲斐」と感じている方がいるため、活動者が役割を持てる仕組みや居場所が必要である。
- ・事例を通じ、参加者にとっても想像しやすく、広い視点を持つことやボランティアでできることも多様にあることを知る機会となった。
- ・活動がより良くなるための意見も多く出て、ボランティア活動に対する想いや意欲がうかがえた。

■福祉出張講座の実施

ボランティアや NPO 等の協力で、車いすの操作方法や手話体験、ボランティア入門講座などの出張講座を区内の学校で実施し、ボランティア・市民活動への理解促進を図る。

	令和4年度	令和3年度	令和2年度
講座実施校	7校	5校	2校
延べ参加者数	1,809人	1,871人	910人
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア入門講座(4校) ・手話体験(2校) ・車いす体験講座(2校) ・アイマスク体験 ・盲導犬の話 ・切手整理ボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア入門講座(2校) ・手話体験(4校) ・アイマスク体験(2校) ・盲導犬の話 ・切手整理ボランティア ・災害ボランティアの講話 	<ul style="list-style-type: none"> ・手話体験(2校) ・アイマスク体験 ・盲導犬の話 ・切手整理ボランティア



▲車いす体験講座



▲盲導犬ユーザーによる盲導犬の話

【傾向と課題】

- ① 講座を再開する学校が増加傾向にあり、実施校数はコロナ以前とほぼ同数まで回復。
- ② 新規の講座依頼もあり、ボランティア理解のすそ野が広がりつつある。
- ③ 講座実施後、地域でのボランティア活動にどうつなげていくかが今後の課題。

【5】災害に関する取組み

■災害ボランティアセンター開設・運営訓練

参加者数:社協職員21名/公募参加19名

これまで社協職員の内部研修として実施していた「災害ボランティアセンター(以下、災害 VC)開設・運営訓練」を、地域住民や区内企業、NPO・NGO の方々など「区民参加型」訓練として、試行的に実施。



来所された区民の困りごとの聴き取り



災害ボランティアの受付

【成果】

- ・災害VCの機能や役割、開設からの流れについては、職員・参加者ともに理解を深める機会となった。
- ・参加区民の意見をもとに作成したシナリオへの対応について、職員の相談対応についての意見もあり、幅広い声を拾うことができた。
- ・「災害時にどのような支援ができるかわからない」という意見に対し、被害想定をもとにした区民の困りごとを訓練で扱うことで、参加者一人ひとりが「自分のできること」を考える機会となった。

■CMN(ちよだモデルネットワークの取組み)

CMNは、災害学習会に参加したメンバーで立ち上げ、学習会の企画やネットワークづくりのための情報交換に取り組み、ネットワークの中核で顔が見える関係を築いている。また、CMNが災害時に具体的にどのような支援行動をとるか、行動指針の作成を進め、令和5年4月現在30団体がネットワークに加盟。



最新の行動指針は、こちらのRQコードを読み取ってください。

■災害学習会の企画・開催

～首都直下地震の新しい被害想定から考える～
自分の生活を守り
「ちよだ」の防災・減災のためにできること

【内容】

都心南部直下地震における新たな被害想定の確認とマンションにおける在宅避難の課題と、要配慮者支援について学ぶ。

17団体 21名参加

災害ボランティアセンターの基礎知識と
千代田区の特性を踏まえた災害想定

【内容】

災害VC開設・運営訓練と連動し、訓練の振り返りと千代田区の特性を踏まえた災害想定に対する支援プログラムを考える。

20団体 19名参加

災害時に「どんな支援ができるか」ではなく、「どんな支援をするか」

【内容】

要配慮者に焦点を当て、災害関連死をいかに少なくするか、平時からCMNの活動が大切であることを学び、CMNのできることを活かしてどんな支援ができるか考える。

12団体 17名参加

ちよだモデルネットワーク主催 災害学習会
～首都直下地震の新しい被害想定から考える～
自分の生活を守り
「ちよだ」の防災・減災のためにできること

今年の5月、東京都では首都直下地震および南海トラフ地震等による被害について、10年ぶりに被害想定数値の見直しが行われました。建物の耐震化、千代田などハード面での強化がなされる一方、新型コロナウイルスに伴う、不要不急の外出を避ける期間が続いたため、地域の共助力の低下や、想定以上の災害発生が頻発していることを考えると、データ上被害想定数値が下がったことを、楽観することはできません。災害時、まずは自分の命を守ることが大切ですが、「生活の再建」のために、地域ができることは何か、今一度考えたいと思います。

1995年に発生した阪神淡路大震災では、救助された方の約77%が、自動車やバイクで命を助かれています。

ちよだモデルネットワーク主催 令和4年度第2回災害学習会
災害ボランティアセンター
開設・運営訓練/災害学習会

無料参加
千代田区での災害ボランティアについて考える

日時 令和4年11月1日(火)

第1部 災害ボランティアセンター開設・運営シミュレーション訓練
14時～17時 定員:30名(申込順)

第2部 災害ボランティアセンター基礎知識
千代田区で想定されるボランティア活動
18時30分～20時 定員:30名

事前説明会日時:令和4年10月24日(月)15時～16時
事前説明会会場:かがやきプラザ4階研修室

ちよだモデルネットワーク主催 災害学習会
災害時に「どんな支援ができるか」ではなく、「どんな支援をするか」

【日時】令和5年3月16日(木)18:30～20:00
【会場】かがやきプラザ4階会議室(千代田区九段南1-6-10)

※オンラインで参加できる方は、オンラインでの参加を推奨しています。
【会場定員】15名(申込順) 【参加費】無料

【講師】
認定NPO法人レスキューストックヤード 常務理事 浦野 愛氏

阪神・淡路大震災では、同朋大学の学生が設立した支援サークル「同朋大学ボランティアネットワーク」が、被災者支援にあたった。卒業後、特別養老ホームデイサービスセンターで介護職として勤務したのち、レスキューストックヤードの設立と同時に、事務職スタッフとなり、2004年度より事務局員、2009年度より常務理事を務める。遺族者支援や災害時要配慮者への支援事業を中心に、地域防災・災害ボランティア等、各種講演会・講座講師、支援プログラムの企画・運営を行っている。自命館副主。

【成果】

- ① CMNの行動指針(初版)をリリース。
- ② ちよだボランティアセンター登録団体の要件に災害学習会等への参加協力を加えたことで、ボランティアグループの学習会参加数が増加。

【傾向と課題】

- ① 千代田区の地域特性を踏まえた災害時の課題に対し、どう向き合うか行動するかという観点で学習会を企画。
- ② 千代田区に関わる団体にCMNに参加してもらうために、ネットワークのあり方や広報の仕方を再考する必要がある。

■災害時の自助・協力の意識醸成

災害時寄り添いサポーター
養成講座

【内容】
災害時の避難の際、高齢者や障がいのある方など配慮が必要な方々を支えるための基本的な知識を身につけ、普段から困っている人の気持ちに寄り添う人材の養成講座を実施。

全3回 延べ47名受講

災害ボランティアフォーラム
2023

【内容】
「マンション内の要配慮支援者について考える」というテーマで実施。日頃からマンション内の支えあいの取組み事例を聞き、千代田区で取り組むことができる集合住宅での協働について考えた。

参加者21名

大学生災害ボランティア
養成講座

【内容】
区と災害協定を結んでいる大学の在大学生を対象に、千代田区の地域特性を踏まえた被害想定や、大学生だからこそできる支援活動を伝えた。

4大学で6回実施 延べ167名が受講

【成果】

- ①災害ボランティアフォーラムは、令和3年度のフォーラムの内容(在宅避難生活を考える)の続編として実施。災害時だけでなく、日常的にマンション居住や地域でのコミュニケーション作りを考えていきたいと感じた方が多くいた。
- ②災害時寄り添いサポーター養成講座を受講したサポーター有志による「災害時寄り添いサポーターの会」が立ち上がり、入会する人が増加している。配慮が必要な方に寄り添う防災意識の高まりを感じる。

【課題】

- ① 日頃からの自助や協助の取組みが、地域で孤立した方の発見や支援に繋がることを伝えているが、災害時には公助が何とかしてくれると考える方が多い。

【6】企業・社員のボランティア活動

■ちよだ企業ボランティア連絡会

会員企業:15社

ちよだボランティアセンターが事務局となり、社会貢献活動に関心を持つ区内企業との協働で事業の企画・開催、及び情報交換を実施。

- ① 企業同士がつながり合いどのような社会貢献活動ができるか、情報交換を行い、コロナ前同様に対面開催の協働企画を再開。
- ② 学習会を開催し、区内の福祉施設の課題に対し、何ができるかを検討。



■ちよだボランティアクラブ

企業とその社員が、地域のボランティアグループや福祉施設等とつながりを持ち、法人としての企業と個人としての社員が地域福祉の推進を図る。

企業は、任意で自社の社員が地域や施設等でボランティア活動をした時間に応じた金額を社会福祉協議会に寄付し、社会福祉協議会は、その寄付金をボランティア活動の受け入れ団体等に配分。

	令和4年度	令和3年度	令和2年度
参加企業数	75社	70社	66社
マッチング企業※	18社	17社	17社
受入れ団体数	55団体	55団体	54団体
総活動時間	664時間	642時間	76時間
寄付金額	232,000円	37,000円	108,000円

※マッチング企業

社員のボランティア活動を受け入れた団体に対し、社員の活動時間に応じ金額の寄付を行う企業

企業の強みを活かした取り組み 体験&交流型支援プログラム

①企業体験

- ・ラルフローレン合同会社
×障害児支援事業「フレンズビレッジ千代田」
- ・ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人
×障害児支援事業「フレンズビレッジ千代田」

②企業社員の特技を活かした交流

- ・株式会社パソナグループ よさこいサークル
「今、ひとたび」×岩本町ほほえみプラザ



ジョンソン・エンド・ジョンソン日本法人×フレンズビレッジ千代田による企業体験プログラムの様子

【成果】

- ① 障がい児の企業体験の地域ニーズに対し、機会を設けるとともに、社員ボランティアは、障がい児との関わり方を学ぶきっかけになった。
- ② 対面型の活動も徐々に再開し、参加型のイベントへの協力が増加。

【傾向と課題】

- ① 昨年度に引き続き、大規模単発に実施する傾向にあった企業のボランティア活動は、小規模継続型の活動に移行している。
- ② 地域課題を意識したボランティア活動相談も増加しており、個々の企業ボランティアが持つスキルを個人ボランティアのコーディネートにつなげることができればより活動の幅も広がる。

【7】大学生のボランティア活動

夏休みの宿題を進める会

- ・千代田区内で、小中学生の不登校・発達特性があるなどの児童が増え、環境適応、人間関係の構築でまず子どもが増えているとの相談があった。
 - ・多様な子どもたちが安心できる日中の「居場所」が民間では少なく、今の時代や、千代田区の地域性にあった「子どもの居場所」を模索するため、学生ネット※が「夏休みの宿題を進める会」を企画・実施した。
- ※区内の大学生ボランティアサークルネットワーク。企画の打ち合わせや情報交換を行い、地域の福祉課題の解決に取り組んでいる。

【成果】

- ①マンツーマンで大学生が対応することで、きめ細かく子どもの特性を捉えたサポートができた。
- ②大人が「やらせたい」、「やってほしい」活動から離れて、子どもたちが進んで「やりたい」と思う学びをサポートすることで、人と関わる喜びや楽しさを獲得している様子が見られた。
- ③「少し上のお兄さん・お姉さん」である大学生が関わることで、子どもたちは将来について考え、知る機会を持つようになった。

延べ参加者数30名／延べ参加ボランティア数 44 名

新しく生まれた活動

大学生と宿題を進める会



- ・子どもたち、保護者から夏休み後も継続的に実施を望むことが多かったことを受け、大学生ボランティアの話し合いを経て、定例かつ長期的な子どもの居場所「大学生と宿題を進める会」を実施することになった。
- ・令和5年4月からは、ふれあいサロン登録。毎月2回定期開催を行いながら、子どもたちの安心できる居場所づくりを実践している。

【8】情報発信

情報誌、メールマガジン、SNS 等

■YouTube チャンネルでの動画配信

ちよだボランティアセンターの Youtube チャンネルで、講座のアーカイブやボランティアセンターの紹介を配信しています。



■SNS を活用した情報発信

ボランティア・市民活動情報をすぐにお届けできるよう、Facebook、Twitter を開設しています。



Facebook



Twitter

■メールマガジン～千代田でつなメール～

Eメールを活用して、地域情報やボランティア・市民活動の情報を幅広く提供しています。
(毎週火曜日配信)



メールマガジンの配信登録は、
こちらの QR コードからできます

■ボランティア情報誌

ボランティア募集、助成金情報、ボランティアセンター事業の紹介などを掲載しています。(6,500部 隔月発行)



■ボランティア情報誌

ボランティア活動の普及啓発や、著名人のインタビューを掲載したり、ボランティアグループ活動の紹介をしています。
(年1回発行)



■情報ステーション

区内の商店等のみなさまにご協力をいただき、ボランティアセンターだよりをとれるステーションを設置しています。

設置数

286箇所

■各種ハンドブックの発刊

- ① 初めてボランティアをする方へ向けた「ボランティアハンドブック」
- ② 初めて災害ボランティアをする時、依頼する時のハンドブック
「知っておきたい！災害ボランティアのこと」
- ③ 福祉・医療等支援者のための、ボランティア(インフォーマル)支援を取り入れる方法



社会福祉法人 千代田区社会福祉協議会

ちよだボランティアセンター

〒102-0074 千代田区九段南 1-6-10 かがやきプラザ 4階

電話 03-6265-6522 FAX 03-3265-1902

E-mail volunteer@chiyoda-cosw.jp URL https://www.chiyoda-vc.com/